学校だより
令和２年度３月号　NO．11
令和３年２月26日（金）
足立区立東渕江小学校校長　西澤武

「対話の大切さ」

校長　　西澤武

今年度、本校では算数科を通して、新学習指導要領の趣旨にもあるように「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、校内研究を行い授業改善に取り組んできました。

子供たちは、授業の中でペアやグループで、学習課題の解決に向けて話し合いをしてきました。その活動が学習を深めることにつながったかは、検証していきたいと思います。普段から、子供たちは友達とたくさん話をしています。しかしそれは軽いおしゃべりです。友達と話し合うことで真に学習を深めるには、自分の考えを相手に理解してもらえるように筋道を立てて話す力、相手が何を伝えようとしているか理解しながら聞く力が育っているかが大切だと考えます。

「対話」とは、一方的な行為ではなく、双方向の行為です。「話す」側は、「自分の考えをしっかりとまとめ」「順序を考え、筋道を立てて」「簡潔に」話すことです。「聞く」側は、「うなずきながら」「相づちを打ちながら」「相手が何を伝えようとしているのか」「自分の考えと同じか違うか」「もっと知りたいことは何か」を考えながら聞くことだと思います。相手が何を自分に語りかけているのかを心で傾聴し、相手の考えを受けて自分の感想や考えを述べることで生産的な活動が生まれます。

私たちの日常においても、自分の話をしっかりと聞いてくれていると実感したとき、安心して心の中を打ち明けることができると感じませんか。また、その人の話もしっかりと聞こうと心を寄せませんか。心をこめて「聞く」（傾聴）という行為は、相手への敬意であり、学びのパートナーとしての人間関係を形成することにつながり、質の高い学びを成立させる重要なポイントであるということになります。

子供たちには、さらに積極的な対話を通して、友達の考えに触発されて、これまでなかった新たな考えをもったり、自分の考えを修正したり、より深めたりする、深い学びにつなげてほしいと願っています。これは、学級集団としての好ましい風土作りにもつながります。

今後、「GIGAスクール構想」に基づき、さらにICT教育にも力を注いでいく必要があります。しかし、どんなにICT機器が進化したとしても「対話」を欠いて教育は成り立ちません。まず、私たち大人がモデルとなり学校でも家庭でも地域でも様々な場面でのコミュニケーションを通して「対話の大切さ」を伝えていってはいかがでしょうか。いまだ新型コロナウイルス感染症の収束は見えませんが、子供たちの成長や明るい未来のため、学校は保護者・地域の皆様と連携し、教育を前に進めていかなくてはなりません。

保護者・地域の皆様におかれましては、今年度、様々な教育活動が制限される中ではありましたが、東渕江小学校の教育に対し、ご理解ご協力を賜りありがとうございました。